

## 平成24年度研究開発実施報告書（要約）

### 1 研究開発課題

「自立して学ぶ生徒」を育てる教育課程の研究開発

### 2 研究の概要

知識基盤社会といわれる現在、生徒が学びへの意欲をもち、自ら課題を設定し、解決することができることや、身に付けた知識及び技能、思考力、判断力、表現力を、実生活や実社会で長年にわたって生きて働くように更新したり高めたりできることが求められている。これは、改正された教育基本法第5条に示される「社会において自立的に生きる基礎を培う」ことと深く関わっている。

これらを鑑み、当校では「自立して学ぶ生徒」の育成を研究の中心に据え、教科と道徳、学級活動、総合的な学習の時間について教育課程を新たに編成し、教材と学習過程を工夫して各教科等で実証研究を行った。

その結果、各種検査の結果などから、生徒の意欲、自律、学びの質の高まりが確認できた。このことから、当校が提案する教育課程において、教材と学習過程を工夫することで、「自立して学ぶ生徒」を育てることができるといえる。

### 3 研究の目的と仮説等

#### (1) 研究仮説

教育課程を新たに編成し、教材と学習過程を工夫して指導することで、「自立して学ぶ生徒」を育てることができる。

本研究では、「自立して学ぶ生徒」を「意欲をもち、自立して学び、学びの質を高めていく生徒」と定義した。「意欲」とは、「動機を選択し、それを実現しようとする心の働き」であり、欲求を満たそうとする気持ちである。「自律」とは、「生徒が自分のやるべきことを理解し、自分をコントロールすること」と定義した。「学びの質」とは、「知識及び技能、思考力、判断力、表現力、道徳性などの質」と定義した。

このような「自立して学ぶ生徒」を育てるために、次のように教科と道徳の時間、学級活動、総合的な学習の時間について教育課程を新たに編成し、教材と学習過程を工夫することで、「自立して学ぶ生徒」を育てることができると考えた。

#### (2) 必要となる教育課程の特例

- 既存の教科を母体として、「市民科」「科学科」「技術科」「家庭科」「英語科」を設定した。
- 新設教科として、「総合教科（持続発展科）」を設定した。教科内の分野として、「地域分野」「エネルギー環境分野」「国際理解分野」「総合表現分野」を設定した。
- 道徳の時間と学級活動の時間枠を取り払い、一つに統合して、「じりつの時間」を設定した。
- 総合的な学習の時間として、3年生に30時間を設定した。
- 総時数は1、2年生が1030時間、3年生が1015時間とした。

### 4 研究内容

#### (1) 教育課程の内容

「自立して学ぶ生徒」を育てるために、教育課程の編成に関する研究を行った。具体的には、教育課程に「総合教科（持続発展科）」や既存の教科を母体とした10教科、「じりつの時間」、総合的な学習の時間「SMILEゼミ」を設定し、教材と学習過程を工夫して指導することで、「自立して学ぶ生徒」を育

てることを目指した。

以下、教育課程の概要について述べる。

1) 「総合教科（持続発展科）」

持続可能な社会の構築に必要な内容と能力及び態度について学ぶ教科として、「総合教科（持続発展科）」を新設した。教科内の分野として、「地域分野」「エネルギー環境分野」「国際理解分野」「総合表現分野」の4分野を設定した。そこでは、持続可能な社会の構築に向けて生徒に理解させたい内容や身に付けさせたい能力及び態度を以下のように設定し、持続可能な社会の構築と関わりが深い横断的・総合的な事物・事象を分野別に扱い、それらについて探究的な学習を行った。

「総合教科（持続発展科）」で設定した内容と能力及び態度

	内 容	能力及び態度*
地 域 分 野	1 地域に関すること (1) 地域の観光資源 (2) 地域の振興計画 2 地域が抱える問題に関すること (1) 地域振興計画や観光振興活動 (2) 観光産業の実態 3 1, 2に示す内容における今日的課題を解決するための提案	1 物事を多面的・多角的に考察する (1) 必要な情報を収集し、判断する力 (2) 視点を定めて多様な情報を整理・分析する力 (3) 複数の視点の調和や優先順位などを考慮して考察する力 (4) 物事を見方や発想を変えて捉えようとする態度
エ ネ ル ギ ー 環 境 分 野	1 エネルギーに関すること (1) 日本や世界におけるエネルギー消費の実態 (2) 人口増加、産業の発展とエネルギー消費の推移 (3) エネルギーや資源の循環利用 2 地球環境に関すること (1) 日本や世界が抱える環境問題と現状 (2) 環境問題の解決に向けての取組 3 自然災害に関すること (1) 日本や地域の災害史 (2) 災害と科学的・社会的要因の関連 (3) 自然災害に関する国際的な取組 4 1, 2, 3に示す内容における今日的課題を解決するための提案	2 コミュニケーションを通して身の回りの人、もの、こととの関係を構築する (1) 身の回りの人、もの、ことを共感的に捉えようとする態度 (2) 自分の思いや考えを受け手の状況などを踏まえて発信・伝達する力 3 地域社会・地球市民の一員として進んで社会に参画しようとする (1) 他者と協働して課題の解決を図ろうとする態度 (2) 身に付けた知識及び技能を実生活や実社会で活用しようとする態度 (3) 物事に進んで関わり、持続可能な社会の実現に向けて実践、参画しようとする態度
国 際 理 解 分 野	1 異文化理解に関すること (1) 様々な情報ソースやメディアが与える社会への影響 (2) 国や地域における文化や価値観の違い 2 国際社会が抱える問題に関すること (1) 先進国と開発途上国間の問題とその現状 (2) 貧困や格差の問題とその現状 (3) 国際紛争の問題とその現状	(1) 他者と協働して課題の解決を図ろうとする態度 (2) 身に付けた知識及び技能を実生活や実社会で活用しようとする態度 (3) 物事に進んで関わり、持続可能な社会の実現に向けて実践、参画しようとする態度

\*1 能力及び態度の設定に当たり、2009年度当校研究で定義した「活用力」「社会性」（詳細は当校研究紀要2009 pp. 4-6を参照）や文部科学省が「持続発展教育」（<http://www.mext.go.jp/unesco/004/004.htm>）で示す「育みたい力」、国立教育政策研究所が「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究〔最終報告書〕」で示す「ESDで重視する能力・態度」（詳細はpp. 7-9を参照）などを参考にした。

	(4) 人種差別の問題とその現状 3 1, 2に示す内容における今日的課題を解決するための提案
総合表現分野	1 多様な表現文化に関すること (1) 地域や日本の伝統芸能や表現文化 (2) 世界の伝統芸能や表現文化 2 表現を構成する要素に関すること (1) 舞台表現を形づくる要素 (2) 要素同士の間連によって生み出される性質や雰囲気 3 1, 2に示す内容を基にした表現活動

4分野は、地域分野、エネルギー環境分野、国際理解分野、総合表現分野の学びに、身近な地域から日本、世界という空間の広がり、知識を身に付け、それを基に思考し、表現するという学習の流れをもたせて配列した。

まず、地域分野の学習を行い、身近な地域に目を向け、歴史や自然、生活・文化などのよさを再認識し、地域の発展に向けて参画することに必要感をもつことができるようにした。その上で、エネルギー環境分野、国際理解分野の学習を行い、世界規模の環境問題やエネルギー問題、国際紛争、貧困や格差の問題などを取り上げ、生徒が地域社会・地球市民の一員として自分の生き方や社会の在り方を追究し、持続可能な社会の構築に向けて提言すべきことを考えることができるようにした。最後に、総合表現分野の学習を行い、芸術文化の視点から文化の継承と創造について考えさせるとともに、表現活動としてミュージカルづくりを位置付け、生徒がコミュニケーションの在り方を考え、協働的に物事を進めるために必要なことを身に付けることができるようにした。

## 2) 既存の教科を母体とした10教科

既存の教科を母体とした「国語科」「市民科」「数学科」「科学科」「音楽科」「美術科」「保健体育科」「技術科」「家庭科」「英語科」(以下、「10教科」と示す)では、基礎的・基本的な知識及び技能の習得を確実に行うとともに、発展的な内容を扱い、教科の中で探究的な学習を行った。

当校「社会科」と「理科」は、これまでも実生活や実社会に関連の深い内容を取り上げて教科指導に取り組んできた。それらの実践を基にし、「社会科」では市民的資質、「理科」では科学的な見方や考え方で自然を解釈できる能力などの教科における課題解決と密接に関係する資質と能力の育成を重視し、「市民科」と「科学科」を設定した。

## 3) 「じりつの時間」

道徳の時間と学級活動の時間枠を取り払い、一つに統合して「じりつの時間」を新設した。そこでは、集団活動を通して道徳的価値について体験的な学習を行った。それにより、道徳でねらう道徳的実践力や学級活動でねらう自主的・実践的な態度を結び付け、実生活や実社会で生きて働くようにした。また、「持続発展科」との関連を図った。

## 4) 総合的な学習の時間「SMILEゼミ」

3年生が卒業研究を行う時間として、総合的な学習の時間「SMILEゼミ」を設定した。そこでは、生徒が自分にとって意味や価値のある課題を自ら設定し、各教科等で身に付けた知識及び技能、思考力、判断力、表現力などを基にして、情報の収集、言語による整理・分析を行い、横断的・総合的、協働的に各自の課題解決を図った。最後に、学習の成果を卒業研究発表会で発表し、学習をまとめた。

教師は、生徒一人一人が真に自立して学ぶことができるよう、自由な発想に基づいた学習活動を認め、支援した。また、問題解決の過程では、問題に関する様々な情報や価値に触れたり、自ら価値判断をしたりしながら、ものの見方や考え方を広げ、人や社会、自然との関わりや自分の生き方に迫ることができるようにした。

学期	1	2	3	1	2	3	1	2	3
地域	55h								
エネルギー環境			65h						
国際理解				35h					
総合表現							45h		
	1年生			2年生			3年生		

4分野の配列

## (2) 研究の経過

第1年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 各教科で、目標（目指す生徒の姿）とそのための具体的な手立てを設定した。</li> <li>○ 1年生に重点を置きながら授業実践を重ねた。</li> <li>○ 授業実践などを基に、「基礎教科」「総合教科」の単元・題材の内容や配列を見直し、3年間の構想を立てた。</li> <li>○ 第2年次に向けて、2年生を中心に主に「総合教科」の単元・題材の内容や教材、単元・題材構成などを見直した。</li> <li>○ 「意欲、自律、学びの質」が高まった具体例と評価について考察した。</li> <li>○ 総合的な学習の時間のテーマ、内容などを見直した。</li> <li>○ 他校の研究協議会への参加、先進校への視察を行った。</li> </ul>
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 見直した「基礎教科」「総合教科」での教育課程を実施し、2年生に重点を置きながら授業実践を積み重ねた。</li> <li>○ 授業実践などを基に、「基礎教科」「総合教科」の単元・題材の内容や配列を見直し、3年間の構想を修正した。</li> <li>○ 第3年次に向けて、3年生を中心に「基礎教科」「総合教科」の単元・題材の内容や教材、単元・題材構成などを見直した。</li> <li>○ 「意欲、自律、学びの質」が高まった具体例と評価について考察した。</li> <li>○ 総合的な学習の時間の実施時期などを見直した。</li> <li>○ 他校の研究協議会への参加、先進校への視察を行った。</li> </ul>
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 見直した各教科等での教育課程を実施し、特に3年生に重点を置きながら授業実践を積み重ねた。</li> <li>○ 授業実践などを基に、各教科等における全学年の単元・題材の内容や配列を見直し、まとめた。</li> <li>○ 他校の研究協議会への参加や先進校への視察を行った。</li> <li>○ 「自立して学ぶ生徒」の育成のための教育課程の在り方を提言した。</li> </ul>

## (3) 評価に関する取組

第1年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 全校生徒と保護者を対象としたアンケート調査を4、7、12月の年3回実施し、「自立して学ぶ生徒」を育成することができたかを分析した。</li> <li>○ 全校の生徒を対象として標準学力テストと学習適応性検査を年度初めに実施した。特に1年生の実態を把握し、全国と比較して考察した。</li> <li>○ 各教科等で全校生徒を対象としたアンケート調査を学期ごとに行い、教材と学習過程の工夫の有効性について分析した。</li> <li>○ 「基礎教科」、「総合教科」、道徳の授業公開を6、9、10月に実施し、「目指す生徒」を育成する上で、教材と学習過程の工夫が有効であったかを分析した。</li> <li>○ 職員を対象としたアンケートを12月に実施し、研究に対する意識を調査した。</li> </ul>
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 全校生徒と保護者を対象としたアンケート調査を7、12月の年2回実施し、第1年次の結果と比較して、「自立して学ぶ生徒」を育成することができたかを分析した。</li> <li>○ 全校の生徒を対象として標準学力テストと学習適応性検査を年度初めに実施した。特に2年生の実態を把握し、全国と比較して考察した。</li> <li>○ 各教科等で全校生徒を対象にしたアンケート調査を学期ごとに行い、教材と学習過程の工夫の有効性について分析した。</li> <li>○ 「基礎教科」、「総合教科」、「じりつの時間」の授業公開を6、9、10月に</li> </ul>

	<p>実施し、「目指す生徒」を育成する上で、教材と学習過程の工夫が有効であったかを分析した。</p> <p>○ 職員を対象としたアンケートを12月に実施し、研究に対する意識を調査した。</p>
第3年次	<p>○ 全校生徒と保護者を対象としたアンケート調査を7, 12月の年2回実施し、第2年次まで結果と比較して、「自立して学ぶ生徒」を育成することができたかを分析した。</p> <p>○ 全校の生徒を対象として標準学力テストと学習適応性検査を年度初めに実施した。特に3年生の実態を把握し、全国と比較して考察した。</p> <p>○ 各教科等で全校生徒を対象にしたアンケート調査を学期ごとに行い、教材と学習過程の工夫の有効性について分析した。</p> <p>○ 各教科等の授業公開を6, 9, 10月に実施し、「目指す生徒」を育成する上で教材と学習過程の工夫が効果的であったかを分析した。</p> <p>○ 職員を対象としたアンケートを12月に実施し、研究に対する意識を調査した。</p>

## 5 研究開発の成果

### (1) 実施による効果

#### 1) 生徒への効果

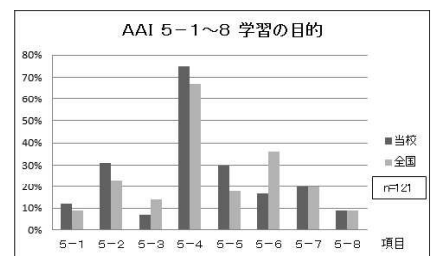
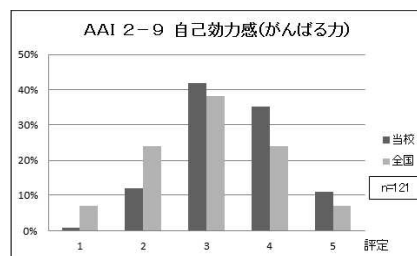
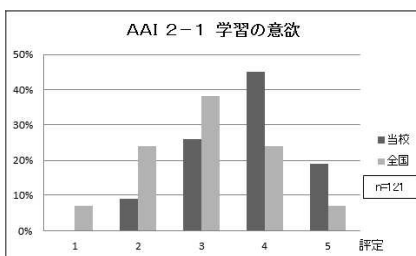
各種検査の結果から、生徒が意欲をもち、自律して学び、学びの質を高めている、すなわち生徒が自立して学ぶことができていることが確認できた。したがって、当校が提案する教育課程と、教材と学習過程の工夫は有効であったといえる。以下に、前述した評価材料とその内容について述べる。

#### ① AAIと全国学力・学習状況調査の結果

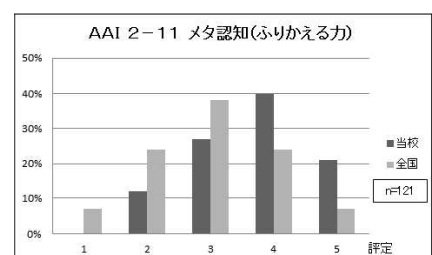
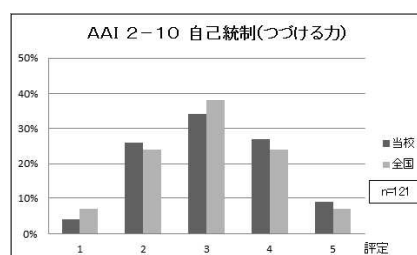
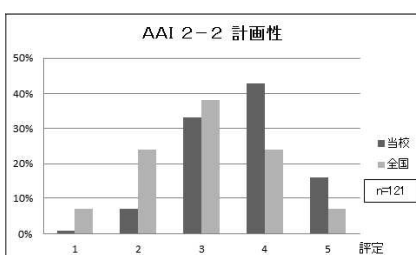
意欲と自律の高まりを探るために、2012年4月に全校の生徒を対象として教研式学習適応性検査（以下、「AAI」と示す）を実施した。また、3年生を対象として全国学力・学習状況調査を実施した。ここでは、特に2012年度3年生に焦点を当て、総合的に分析したことを述べる。

まず、AAIの中で、意欲と自律に関連して取り上げた項目とその結果を以下に示す。

「学習の意欲」、「自己効力感（がんばる力）」では、5段階分布を当校3年生と全国で比較すると、全国より望ましい状態である。また、学習の目的の各項目では、出現率が全国と比較して高い。これらのことから、当校3年生がおおむね意欲的に学習に取り組もうとしていると判断できる。



「計画性」、「自己統制（つづける力）」、「メタ認知（ふりかえる力）」では、5段階分布を当校3年生と全国で比較すると、全国より望ましい状態である。これらのことから、当校3年生が見通しをもち、振り返りながら、粘り強く学習に取り組んでいると判断できる。



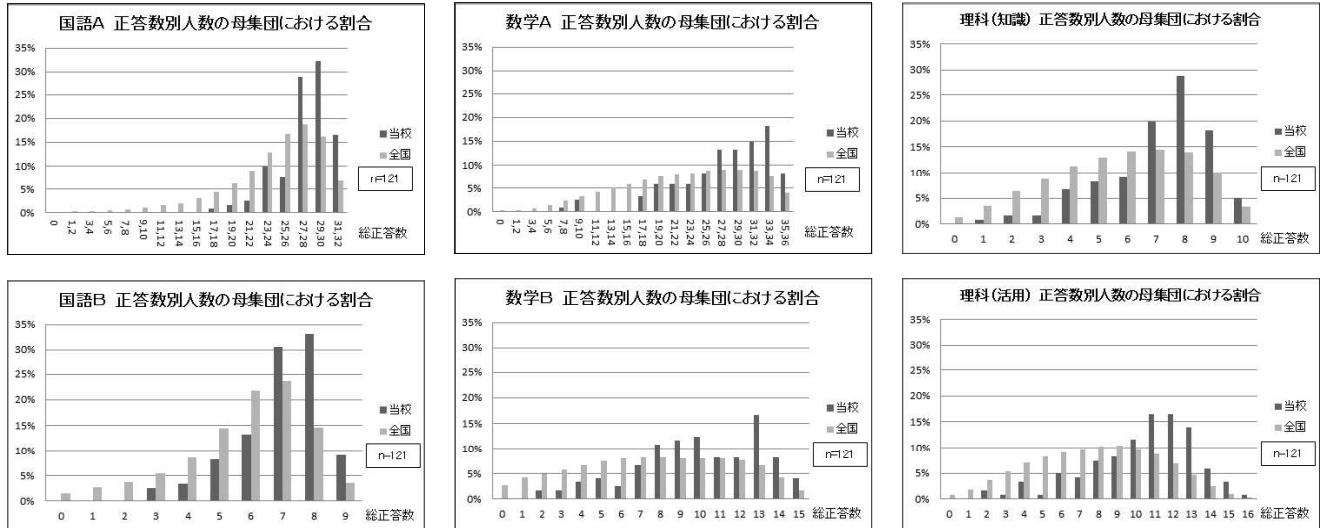
次に、全国学力・学習状況調査の質問紙調査で、意欲と自律に関連して取り上げた項目とその結果を以下に示す。取り上げた全ての項目で、肯定的な回答の割合が全国と比較して高い。

項目(4)(5)(6)の結果からは、当校3年生が達成感や自己肯定感に支えられながら自己実現に向かっていると判断できる。



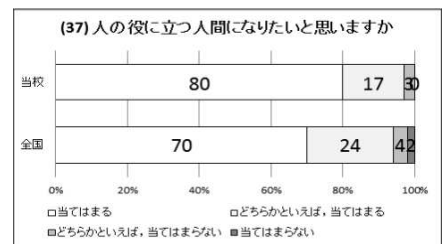
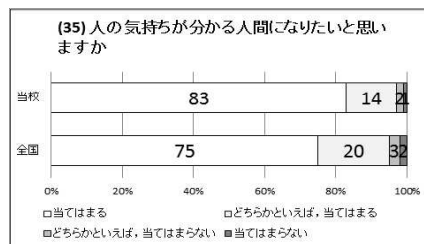
次に、全国学力・学習状況調査について、国語AとB、数学AとB、理科（知識と活用）の正答数別人数の母集団全体における割合を、全国と当校3年生とで比較した結果を以下に示す。

国語と数学はA問題（主として知識）とB問題（主として活用）が、理科は主として知識に関する問題と活用に関する問題が、それぞれ設定されている。その双方で、全国と比較して正答数が多い。このことから、基礎的・基本的な知識及び技能と思考力、判断力、表現力を、国語科と数学科、科学科ではバランスよく身に付けていると判断できる。



また、学びの質の一つとして挙げた道徳性に関連して取り上げた、全国学力・学習状況調査の質問紙調査の項目とその結果を以下に示す。

ここに挙げた二つの項目は、肯定的な回答の割合が全国と比較して高い。項目(35)の結果からは、当校3年生が他者を思いやる気持ちを強くもっていると判断できる。また、項目(37)の結果からは、当校3年生が他者に貢献したい気持ちを強くもっていると判断できる。これらは道徳的価値の一部ではあるが、当校3年生の道徳性の高さが確認できる。



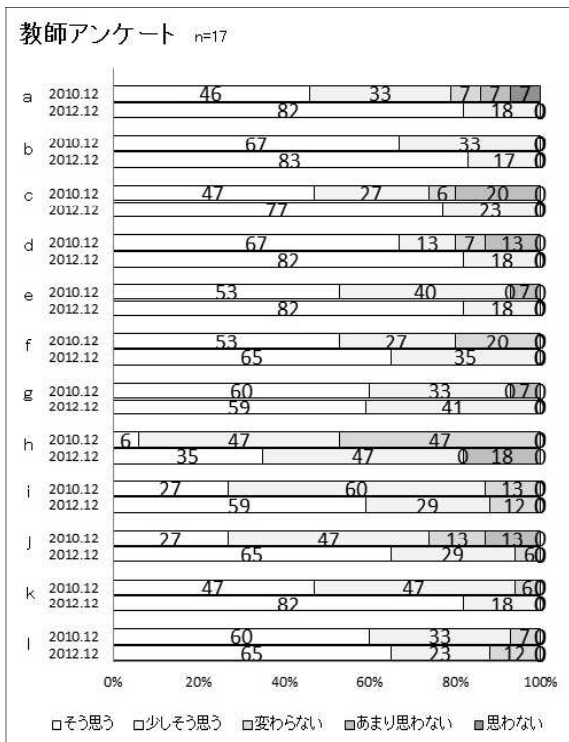
NRTと全国学力・学習状況調査の結果を総合的に捉えると、一部教科のデータからではあるが、当校3年生が知識及び技能を身に付け、思考力、判断力、表現力、道徳性を高めていると判断できる。これらの姿は、当校で定義した学びの質に合致するものであり、生徒が学びの質を高めているといえる。

以上の結果から、生徒が意欲をもち、自律して学び、学びの質を高めている、すなわち生徒が自立して学ぶことができていると判断できる。したがって、新たに編成した教育課程と、教材と学習過程の工夫は有効であったといえる。

## 2) 教師への効果

教師を対象に行ったアンケートの質問項目と結果を次頁に示す。

全ての項目で肯定的な回答が増えている。特筆すべきは、項目hにあるように、研究開発の実施によって、これまで以上に教育実践に自信がもてるようになった教員が増えていることである。実践を公開し、協議を重ねてきたことが、自信の高まりにつながったと推察できる。

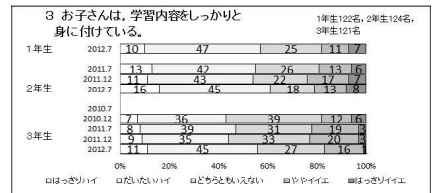
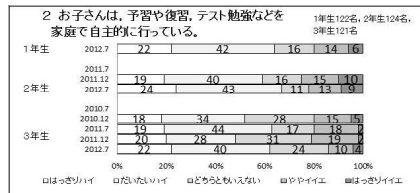
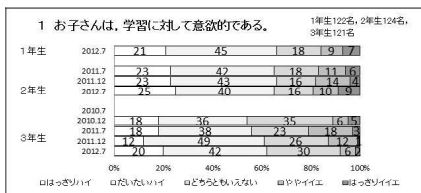


- a 研究開発の実施によって、授業などでこれまでにない生徒の新しい発想や新たな面が見られるようになりましたか。
- b 研究開発の実施によって、既存の教科や再編教科に関する本を買った、新聞を注意して読むようになったなど、教材研究をこれまで以上にするようになりましたか。
- c 研究開発の実施によって、既存の教科や新設教科への理解が深まりましたか。
- d 研究開発の実施によって、これまで以上に教材を工夫するようになりましたか。
- e 研究開発の実施によって、これまで以上に学習過程を工夫するようになりましたか。
- f 研究開発の実施によって、他の職員と教材や指導方法等についてこれまで以上に話すようになりましたか。
- g 研究開発の実施によって、これまで以上に教育実践に意欲的に取り組むようになりましたか。
- h 研究開発の実施によって、これまで以上に教育実践に自信がもてるようになりましたか。
- i 研究開発の実施によって、これまで以上に熱心に研究会議や校外での研修（他附属等）に参加するようになりましたか。
- j 研究開発の実施によって、生徒がこれまで以上に意欲的に授業に取り組むようになったと思いますか。
- k 「自立して学ぶ生徒」を意識して、研究開発に取り組んでいますか。
- l 次期学習指導要領の改訂に、当校のこの実践が生かされることを意識して研究に携わっていますか。

### 3) 保護者への効果

保護者アンケートの意欲、自律、学びの質に関する質問項目と結果を以下に示す。

項目1では、自分の子供が学習に対して意欲的であることについて肯定的に捉えている保護者の割合が6割前後であり、3年生では回を追うごとに高まっている。項目2では、自分の子供が家庭で自主的に学習していることについて肯定的に捉えている保護者の割合が6割程度である。3年生は2年生時の12月で一度低下したが、3年生時の7月で再び上昇している。項目3では、自分の子供が学習内容を身に付けていることについて肯定的に捉えている保護者の割合が5割程度である。多少の増減があるものの、研究3年次に向けて少しずつ高まっている。



以上の結果から、生徒が意欲をもち、自律して学び、学びの質を高めている、すなわち生徒が自立して学ぶことができていることに対して、保護者が一定の肯定的な評価をしていると判断できる。このことも、新たに編成した教育課程と、教材と学習過程の工夫の有効性を示すものといえる。

#### (2) 実施上の問題点と今後の課題

本研究では、各教科等で教科の特性に合わせて探究の過程を位置付けることで、「自立して学ぶ生徒」の育成に一定の成果を得ることができた。今後、各教科等で位置付けた探究の過程について協議を重ね、更に練り上げることで、汎用性をより高めていきたい。

また、ICTを学習場面で効果的に利活用することで、これまで容易ではなかった追究が可能になったり、学習活動の時間短縮が図られたりするなどの効果が期待できる。当校は総務省「フューチャースクール推進事業」及び文部科学省「学びのイノベーション事業」の指定を受けている。これらの研究と連動し、タブレットPCとIWB、協働教育ソフトなどのICTを効果的に利活用することで、生徒が一層自立して学ぶことができるよう、実践的研究を更に推進していきたい。